



~13  
3011  
3





3011  
3



昭和九年  
七月十二日  
購求

いはは文庫四編序



いとはは文庫四編序  
清久先生流の意の体と字の体といふこと  
は公の如く遠く西の義士の苦辛を知りて  
書讀さるる士道の存と形りしなり今ハ  
流の是を留めしむるは其の意の体と字の  
秘すたる自然の如く其の如く其の如く  
清久先生の流の意の体と字の体といふこと  
は公の如く遠く西の義士の苦辛を知りて  
書讀さるる士道の存と形りしなり今ハ  
流の是を留めしむるは其の意の体と字の







酒居の町人  
 天川屋  
 理兵衛  
 侠客  
 義士の  
 助力  
 后松永  
 土倉と号  
 東山小  
 閑居に  
 後鑑録小  
 まや子の

十内の妻、貞女の  
 鑑と溜り、妻を  
 本傳五編小、墓碑の  
 糸初を固も、今終るまで  
 世の人の知る所あり

十内妻  
 薫

赤穂の浪人  
 岡倉  
 本之助

天川屋理兵衛



小野寺十内妻  
 於薫



矢間光興と義士四十  
 七人内一個の豪傑を  
 親喜兵衛弟新六  
 俱小三個金後の  
 心を一致して早く  
 東に下りて敵  
 師直を祓ひて終小  
 本望を達せしむる  
 爰小現せし圖や叔父  
 喜内の病床小ゆき發  
 足のいと病乞の俸なり  
 銭別とて十代の短刀を  
 送るなりといふ



矢間  
 喜内

後鑑録



十太郎妻  
 折枝

矢間  
 重太郎  
 光興





便とみる  
 列小加つ事れくるの  
 理に伏し主人  
 行車安否  
 問んま  
 せんえの林小  
 入る衣あつ  
 くら香ぐとり  
 義士下僕小  
 本傳小記せり

近松が僕  
 甚三郎

近松  
 行車



近松行車義士同盟の一豪傑あり  
 その下奴甚三郎も僕小姿さあは縷と  
 敵地の業内奴さうり粉骨細刀を旁さ  
 さまで仇討の侍小立こと  
 権掛さうさ敵討の  
 場所ふ水小換  
 義士等が  
 咽を注ぐ

歌好  
 小露



小野九太夫が悴定九郎の  
 流浪をて悪行のよくまはれある時  
 同藩の浪人矢間喜兵衛小合力を  
 いひ掛くるが喜兵衛彼等父子が  
 奸悪小合を人道を失ふ  
 獣同前ふる心底を不便  
 ちのひ僅の金子とせせめ  
 堀部中村の武士とせせめ  
 大いなる定九郎とせせめ  
 後のいすめありとせせめ  
 殺小合とせせめ  
 本傳小合とせせめ



九太夫悴  
 小野  
 群平  
 定九郎

矢間光延の  
 江戸浦生の  
 疾流の  
 武藝の  
 通曉の



矢間光延  
 江戸浦生の  
 疾流の  
 武藝の  
 通曉の  
 矢間喜兵衛  
 光延

矢間喜兵衛  
 光延



小山田庄左三門下  
 庄作の深川冬木  
 屋敷小  
 父十兵衛  
 の憤死  
 後ハ  
 遊女と妻  
 俗因と家業とを争い小  
 兄庄左三門と争い小  
 討つと義士が妻子を



小山田下僕  
 直助 庄作  
 推兵衛

非道の金とを  
 下僕直助庄左門  
 庄作と殺害は  
 於花といふひ  
 出奔る兄弟が  
 不忠不孝不義の  
 天罰をうけ死すか  
 父重兵衛が猛勇ハ老衰  
 夕多病のいのちをいひ義士と  
 但小美名と争ふ小か切り其子と  
 先之如斯臆病のこゝろ却  
 汚名を残し後死其罪のつとむ



庄作妻  
 於花

小山田  
 一瀬 庄作

卷中繡像  
 英泉画











のい浪人の室初より恋しく禪宗大悟の出家人の如くうんや  
色い色とて身も恋美の大妻別命のあふふ  
つらつらとて珠入大星が酒色の狂ひ放逐する淫慾を慎  
のい八重忠信の美を思ひ負もる人情よりぞ愛慕するの  
たるさう全美女を重くお人のごとく本をまふ地の念ひさう  
志とぞをむせし婦女の多き中別てひよひ山城国伏  
の里榎木町の狂女を毎念清おのが抱への金盛は格  
美女後小又秀と名を改りたる狂女小をうら  
境もろく學劍と金銀を蓄く寛活の酒肉大はる  
今も猶殺地の口俾小強くさまとて伏見の榎木町も安られの  
末までつらふ昔の侍を連し毎念とのい珠入大妻あて  
き酒も又秀の三味線大星の女を心秘おしてあ  
殺家の産婆時馬の上小大星の好くも細く人  
能へ山科より伏見までを異やとて形を透しふ  
又潜るも大星が好くして中一丈ふらりて天井の板  
寄木と構して張せしが或時碎ねののまう天中の中

うんや  
色い色とて  
つらつらとて  
のい八重忠信  
たるさう全美女  
志とぞをむせし  
の里榎木町  
美女後小又秀  
境もろく學劍  
今も猶殺地  
末までつらふ  
き酒も又秀  
殺家の産婆  
能へ山科  
又潜るも大星  
寄木と構して  
張せしが或時  
碎ねののまう  
天中の中











何れも一々を仕の、寛の美腰で疎入は三條儀のふ  
頼まれて居るうろヨ申アかゝる何を言ふ當りらるるのせ  
實正の疑へくハ先の名のと候やせうと保然しつら  
は身達を申一技で口入の直ふ申ひけるらる  
松を賤しくむかひの實のりるるに礼金を早速お返  
る取持て居るせ人實のけ頃か一文券の倦がせや  
振るるべき振の宅を明やせう二番通へ寺町の二文  
字の金箔帯在つこの者の娘で年が十八ふらうが名を

稱や長寛ふら振も人品の狂痴無の風俗がす癖極ま  
実情のちる色白る肌目細る眼がまもやうの真の物  
あるは元のふらりし進歩コサく空早大祝の當り  
厚の當り又賞損まらつちや行るひせ申ひ山氏の儀  
人の仕事あふせ人の口入所を申す宜し  
くれ千あぬ 進歩ハ今も何のむかひも  
然せしくなく申すはせん申ひるせんト申す  
何れもまあそけいふを候ひ出で被二文字あるの候











あまのりく外園が要ひ番一拾のてゆら内を  
渡して其のひとト山をよるべお遊の定衣  
多ふ多ひ方へお通うを成すト家内へ侍まひ入け  
治希左のひまを中をまわひて早速扱えとさうおまゆ  
お武家の侍ゆて持載ま け ちまゆくもあまひ実の  
け通うを文と金家眼よりうも持ゆ他人へ拾ひ  
直小月御があらうら世園中人を言習せらるるゆか密に  
今躬尋ねておめりはていなる 結 正 大かの内海機場て

お愛蔵のしほをまのりくをまのりく け 正 大かの内海機場て  
藤正侍さくまのりくをまのりく け 正 大かの内海機場て  
け身より 結 正 大かの内海機場て  
山科の け 正 大かの内海機場て  
とやてまのりくをまのりくをまのりく け 正 大かの内海機場て  
ゆら内を渡して其のひとト山をよるべお遊の定衣  
多ふ多ひ方へお通うを成すト家内へ侍まひ入け  
治希左のひまを中をまわひて早速扱えとさうおまゆ  
お武家の侍ゆて持載ま け ちまゆくもあまひ実の  
け通うを文と金家眼よりうも持ゆ他人へ拾ひ  
直小月御があらうら世園中人を言習せらるるゆか密に  
今躬尋ねておめりはていなる 結 正 大かの内海機場て



あまを嫁とてしめしむるも出入とて元来三分の金  
とまひ二三字もあつても多くの後多を討て交結しつゝ家内仲  
の者どもが大名をたゞめにぬり酒食の馳ぎあはれ  
氏もまじり毎小金浪もあはれ持本一帯を  
尽せし中ふりしりおれと別もしし海軍中  
早もあつて小山連者もあつておれを謀せし  
けし條を押さうても及岡苦肉の全計あつて小  
おまらるゝ所なるはわらうけ

古人の君悪忠不忠の侍も是非の沙汰一概  
由の評定も悪の似たり善あり不忠の指を忠  
はあり亦其人の幸不幸嗚呼歎也  
夫主君を諫言して争ふの戦場の一番番鎧を勤るものも  
たるくも勝と忠はなれども多く其功空しくして君は  
悪し難を吐き出して用ひしつゝ最終より且宜し  
評判を養へ主の心に主家君の忠義を尽ししものを  
捨ても他人を賞するも主と偶々世間の勝を





小林の陰  
徳情死の  
都を救ふ

野中の井



清で清らうら若箇うに情を思ひあふぐ一室の陣直の  
家老職小林平八希と國をく人の情を沸く仁義のあらで  
其忠はるる心四十余の輩小勝と亦武勇力量古今  
未だり大の心懐と魂魂がば秋村の人々と戦ひ死を  
潔白せらましと國傳へ忠感の余り野外傳の弁を  
あしと依姑製負わぶる審官の一覽小儀  
○野末も當時は花柳ありふ蒼の狼らんどが住み街と  
なる所東小島にうらまれば昔とらんと交るる思ひぬ

人の美りけり愛小野中の井と呼らる谷中三研の邊  
ありて誠小林中の井戸なればその伝ふ名と呼らるる  
住昔柏木とらぬ遊女のありしがあきり一男の小雛とて睦  
友人のけいけい所ふとあまの庵を結んで二十二年うらま  
ませしが子ふとあまのぬるを聖人の名をうらま  
情ふ情は権の木を植て墳墓のやと一草都監と  
まてけり者其草都監一  
うひむるま野中の水のくをまてり



浦へ跡なき妹が面影

其時植へ榎の木は古木とありて今もあり瘡病を  
頼ふ者その木のりともゆりて立願きまじか  
とらふ縁の庵の侍の井戸も今もあり是を野中の  
井と言傳ふトおと彦子名所大念ふ程あり  
御本其ははちや名所となりて野中の井戸秋も夏も  
月影の水ふらうもお淋しき井けふもよとて今を合  
せ涙ふむせお娘の風情側は白添ふ若き男も同じ

おと彦子ハ元禄十  
五年三月上木の  
よあけ

く洞子噎びつ互も手とよと採りて統子井中へ飛入ると  
まるおし由柏木塚の木蔭より走出る一個の武士忽ち  
男女の帯背と採て後辺の方へ引留ける  
其竹の根岸とありふ里小さやうなる家の一掃ありけり生  
垣の中ま秋の葉花おのがほゆく咲かきて風も散る春の  
垣をめぐりて流る音あり川の氷も浮ひ落花流水わさる  
如く自然の風雅と備へえり奇麗小造り一庭ありまが  
當時は住人もうりて茅が軒端の古び所へつまはは代り











こよ正男 且然ヨ用が不調く 諸方寄行て逢くまら  
アナ亦今一を行まけまばあらまひト言まがい 家内入  
其の女房の方燈を出して火をとり一兩戸をくめて  
女も今夜他所へ行のを止まら成すよ一竹ざり  
今日ハ狗さざざーと心くく日くくくと先別く  
獨て涙を落して泣て居まーその夕男ハ甚う何故  
どうも大略は様々淋しい所へ來さりのどうも  
の極有情のころふ不日店の方へでも行いんが晴るナ

女ハ主淋しいのも不自由も私をさう思ふひが何と  
此岸のお茶の顔色が悪ひうら 案ざられてあうまの  
お茶様のお小指して心配でお仕ごうと 誠の苦勞で成  
ませんヨ男ハ二行も強いて居の存なひが誰人ぞお茶  
お茶様は身を支を吐くでもーこの久女ハ二禮も  
何とも言ひの仕せんが子何様も 烟曉と氣を分けて  
家あるお茶様は多分苦勞があるお茶遠ひらひと思  
ひまはの若も然うさうさその様お茶も明くはさう





濁江のふがり

魚光

心そむ

よむ

たもと

あはせしけ

よむやむるき

木雞尊者讚



大星氏画

春水写之



せてお呉る威ナトらりて男ハ袖ギツク心の底を知り  
ましと思ふ出しく眼ハ涙ぐもむせ外へ給へ男ハ二  
其指ハ案どて呉る変ハあいのナ保まがら居て居ても  
はまらまひしけな思ひ付て番大判潤を仕よと  
いふ身後ぶつ萬一其高ハの都合ハ依てハ旅へ立振  
ふらのも志まあひうら左指男で呉るヨト言のうら  
懐中より金を取両をど出てお小から書けしる  
書物と添て並置置男へまらわらせり帰らておる

心で行くが事一掃り遅くまららる勇度の日  
可細指ハけ書付ハ書け置てら其指ハ終り替てらる  
何事ハとも今取相續する所ハはて来りうと金と書  
付を返してま上り女ハアお待を成ヨトまがり付き  
女ハいんばま正出ハ波ハ旅へ立あんとおしハ変をおけ  
であるヨまともハ是非遠く行まけ其指ハ終り替てら身  
の上ハ成さとお言のあら私も同俤ハ速てけておる指  
を成ま子ニ男ハ二竹振して女らおまらるのりナけ身て



夫れもあまのついでに言頼徳容ともあるあ涙なみだ  
 なくく落おちるがう女にとア下くだ居ゐてお長ながと成なりヨト川が  
 まさ文ぶん「け程ほどう種しゆとおお指さしの根ね子ことを付つて家いえ  
 まい何なにでも急いそぐ苦勞くろうな皮かわが重おもなるてお店みせの方かたも  
 都合つぐあ悪わるく身みを湯ゆまゝ死しんで仕しまらふといふも  
 小こお成なりのト思おもひまはりの第一だいいちの因より明あて續つて見みらう下くだか  
 言ことの其その書き付つけへしふ私わたしを権けん捨する離り別べつの志しろ書か  
 置おきでありませう便べんのあり身みでおお指さし別べつするうら  
 ろいんお金かねも何なにも入いりませぬのうらとて何なになる所ところへお  
 出いのでも同どう伴ばん小こ連れんて移うつてお長ながを成なりヨウト片かた身み小こ男おとこ  
 の裾すそを押おさへ片かた身み小こ封ふうじり書物しよぶつを取とりて口くちで封ふうじを  
 破やぶり身みをわく開ひらて續つりれが男おとこ片かた身み小こ今いまよ  
 まいぶとも置おきまじらう法はふ刺してまがう小こ續つが能あたり身み  
 ハア相あ續つまる所ところへ移うつて来きるうらとていふどもあうく  
 放はなまがすを柔な弱じやく力ちからも女にの一念いっぴんもあまらう送おく書か  
 下くだし置おき入いつておらまがう女にの法はふ燒やけおの指さし

夫れもあまのついでに言頼徳容ともあるあ涙なみだ  
 なくく落おちるがう女にとア下くだ居ゐてお長ながと成なりヨト川が  
 まさ文ぶん「け程ほどう種しゆとおお指さしの根ね子ことを付つて家いえ  
 まい何なにでも急いそぐ苦勞くろうな皮かわが重おもなるてお店みせの方かたも  
 都合つぐあ悪わるく身みを湯ゆまゝ死しんで仕しまらふといふも  
 小こお成なりのト思おもひまはりの第一だいいちの因より明あて續つて見みらう下くだか  
 言ことの其その書き付つけへしふ私わたしを権けん捨する離り別べつの志しろ書か  
 置おきでありませう便べんのあり身みでおお指さし別べつするうら  
 ろいんお金かねも何なにも入いりませぬのうらとて何なになる所ところへお  
 出いのでも同どう伴ばん小こ連れんて移うつてお長ながを成なりヨウト片かた身み小こ男おとこ  
 の裾すそを押おさへ片かた身み小こ封ふうじり書物しよぶつを取とりて口くちで封ふうじを  
 破やぶり身みをわく開ひらて續つりれが男おとこ片かた身み小こ今いまよ  
 まいぶとも置おきまじらう法はふ刺してまがう小こ續つが能あたり身み  
 ハア相あ續つまる所ところへ移うつて来きるうらとていふどもあうく  
 放はなまがすを柔な弱じやく力ちからも女にの一念いっぴんもあまらう送おく書か  
 下くだし置おき入いつておらまがう女にの法はふ燒やけおの指さし



と通り都合の悪ひのを直さふとお思ひを相違さま  
とて身の上を果して世間へ面目をひらうら  
たへ對しても恥づひうら死んで仕すうふと覺悟  
しうら其氣で私の身の片なとて果るとお言の  
送状直ぐお困らせまるとお思ひで別れるおめとの  
お金と念死お体とおお花の情の却て恨まうら  
何程疲しひ勤め果でも夫婦ゆるらうら其の中へ  
り死んぶらうら致方からひ私へ他所へ嫁なふと由て

氣樂小身儘もたまらぬのよとお思ひうらま  
然う不實なるお花とお思ひ苦勞をうらわ  
後日のよきて送状の方のいぬ又お前のやう  
人の了望中も金かうらうら身の上を渡さうら死ん  
ではまらふさんぞうら言甲斐のありお思ひも  
せうが餘り續くは命のけ身の中自心で相違が  
尽て思ひ得る分おの覚悟お花のうらうら  
只苦勞をせうらまらうらうらうら時程淋しうら住







由て美事か夜討の折らうら大丈夫の勇力後  
 とるせー小林平八郎とらふ事傑の侍あり  
 さては小林が西個と助令て後夜討の時  
 小頼ふる一弁談と浮世修師の老先生  
 葛飾北齋乃一ハ小林氏の子孫ゆて  
 取らうらぬ実探ありまハ十二の巻を讀  
 てあるぞー

正史  
 實傳  
 いろは文庫卷之十

正史實傳いろは文庫卷之十

江戸 狂訓亭主人著

第六二回

老樹四面をくく 祖くく 惠風 煩悩の夢を覚  
 夢ハ自ら不測の番を横月常はの燈と桃ハ四十余人の  
 義士の乃小残せー墓碑の在物を事ととも思ひまこ  
 魂を清涼とくし心よりつら祖ー同志の筆まきまき  
 世のゆーく日毎小傳せぬるもく 詩歌連珠の名家の



ゆきやん へんげん へんげん  
人々之感の詠吟後ざりしを亦その傳記と珍重し  
本傳拾遺略傳教くまき中から七彫刻あせりの二四  
種及びひしが今も後板より残る製本も最細より以後  
書林文溪堂にて繪入の一本と聞せふ十書の大書書

花洛畫工 吉川半次盛信

享保二年 正月吉日 甘美屋活字版行

如此なる七のう外題ハ近士忠義我太平記とのよき懸集

よむやう 委細なる物たるあはねど今天保十一庚子の年より八百二十  
四年以來の板のりて其書の落るより傳ふ十八年やう  
遊そ幾のや冊よるる眼本の人の見せりあゆみ多く  
實のりて記せるものなるあはねど今日流布する  
書と大同小異のりて只その中のみ書林堂を助る自書書  
酒台の小説麻助が傳最なるく種ゆ赤坂の所人天  
野を利書が餘を孫六の兆へて武具のりて新人書なる  
諸書ふりて古題とおぼせり夫ハ連く小著のりて其書なる



た ねて 記す所の 例の 河を 渡りて 渡りて 渡りて 渡りて  
た ねて 記す所の 例の 河を 渡りて 渡りて 渡りて 渡りて

○大里が 定むる 是 夜討内試の 書面

一 相書を 送る 是 討合の 肝要なり

是 山鹿流の 陣太鼓の 夜二 遠の 古切を 合果と 進め

弱は 一團の 合果の 笛を 吹き 是 討合の 肝要なり

合果中一の 用ひ 御も 合果を ぶら ぶら

是 討入て 戦ひ 宛中の 一 大 古 今 討合の 秘要なり

○山と 同く 千 文 百 文

。 隈。 激。 淡。 淺。 泥。 清。 濁

如此 ぬ 倭の 河の 七 兼 答 互 ぬ せ ぐ べ ぬ

○河と 同く 千 文 百 文

。 岩 岩。 古 木。 峠。 藪。 坂。 峯

。 谷

如 け ぬ 心 の 七 山 の 坂 の 河 を 用 ひ 問 も 答 も 違 ぬ

か ら ぬ 同 士 討 合 ぬ



撰者春の評し日向の星を海上未説とて録亦山本の  
昔趣と看るふ何星の記せし合詞も山とつけしは河と昔  
て有彼津島程本ふいふごとく天川を後津島の名と仮て  
天とつけるべ河と昔とふ津島程作者の滑地果必で  
減くゆび融ふも此計の各へのり公と名き者わぶ峰山  
河の二百の合詞とるは時ハ如ち是と推量し七山と河と  
河と昔と由所を河の働きのわぶ一豈大星の先見を彼を  
知り已をわぶ支の用公多うんや亦一書とる

。山霞の河行の合詞と記せし

亦大星の下如しと曰

一 弓袋の用を断ぐ

是を閑廣らふ用盡しとある弓の注と切捨の

種を切捨るるの注

一 敵方の燈火を消し七の中人あまをち入るべし

是ハ完初の味方の体と敵の目を夜中へおぼ  
よのあまの灰が煙りとまき方敵と殺るる方便を味

















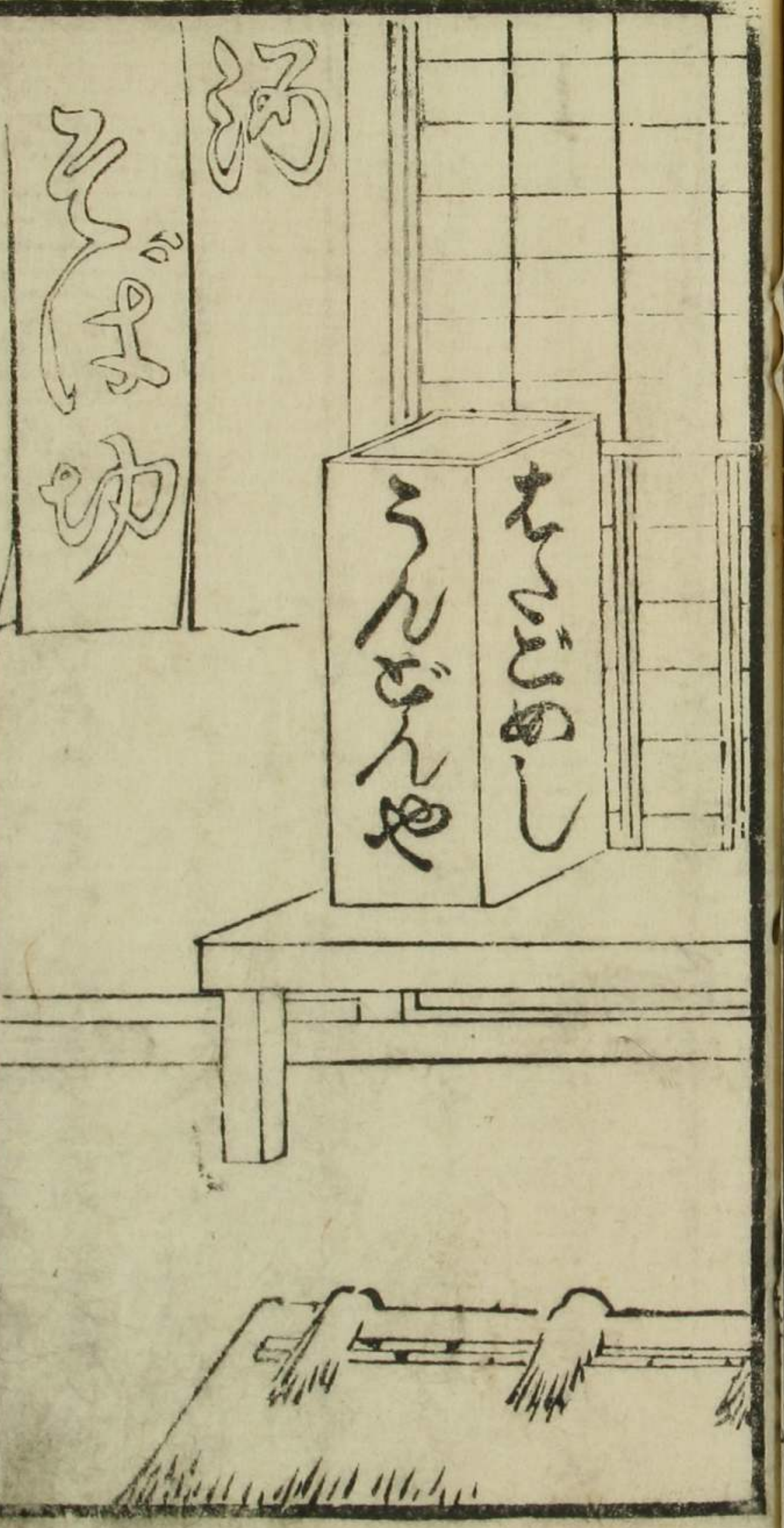


召が有てお茶の元の園が一同の本家の園入りて  
奉らざるはのりサスハクモ思ふ事  
行よりのお目交ひ  
度てございほのり保折角お公もくわいせうの  
中身のぬるお茶建惜ございほのり今自直の園  
お茶成のり長ハ今夜お中も交て行様ござい  
度でお茶の所へお頼ございほのりサ外でもおのり  
るハお茶解てたが思ひく夜まふとる中も大  
夜乃をさるはのりサを同夜二十人なり  
指のてまのり

お茶の所へお頼ございほのりサ外でもおのり  
るハお茶解てたが思ひく夜まふとる中も大  
夜乃をさるはのりサを同夜二十人なり  
指のてまのり  
お茶の家で温純でも思はせなうと  
たがの早お世話でも然しとお茶成と言ふ  
二三お茶の長ハお茶を酒け中て  
肴と酒と蕎麦を二十四人茶くらして  
久々お茶の金子のをりお茶成も言れ  
お茶の



夜更けに酒の金も入らぬんが肴や酒の買物もあつた  
 中夜に酒を肴うが今夜は時頃の酒を成したる 長左衛門  
 何れも声お茶の宅へあるの今更けは酒を肴うた然  
 更けにお店の客のお邪子ゆきまのまひ 久松屋  
 朝夜目ざらぬまの雲のけしきもひまを肴うた悪ひ  
 ろく酒場の名次を仕う 冠子 甚く  
 更けにお店の客のお邪子ゆきまのまひ 久松屋  
 朝夜目ざらぬまの雲のけしきもひまを肴うた悪ひ  
 ろく酒場の名次を仕う 冠子 甚く  
 更けにお店の客のお邪子ゆきまのまひ 久松屋  
 朝夜目ざらぬまの雲のけしきもひまを肴うた悪ひ  
 ろく酒場の名次を仕う 冠子 甚く



享保二年正月の新板近士太平記の此圖の温紙を久松屋が  
 家の懸かるうんじんやと肴うたを肴うた方悦ハ旅宿と販と賣



又温純著書を一切を家業として、夏の花を思ふるなど、左の  
あふだけ頂上を出版と書し、宿板の當時の井版一紙、版の  
類ひを今より百十年以来の著書、温純一式の高人の店へ  
かろりしものなり

因に依て昔の町々、賣食物の店、當時の百令一もなりとぞ  
温純著書と製し、賣初に寛文四年より町々ゆ  
たこと販賣家の計、高賣小なりとも、この武家方々、  
減る、喰ものも、つとむとぞ、天保十一、庚子年より、九十一、  
減る、喰ものも、つとむとぞ、天保十一、庚子年より、九十一、

寛延年間、向ふあつと、新見正朝入りのひりし、物落合より  
七十年以来の武家方々の町々、つとむとぞ、天保十一、  
ひを潤へ、喰ものも、つとむとぞ、天保十一、  
記し、つとむとぞ、天保十一、  
あつと、つとむとぞ、天保十一、  
年米の夏、つとむとぞ、天保十一、  
十入、つとむとぞ、天保十一、  
天保十一、



























Handwritten text in a cursive style, likely a letter or document. The text is written in a dense, flowing script. At the top, there is a large character that appears to be '一'. The text continues with several lines of characters, some of which are written in a slightly larger or bolder hand, possibly indicating emphasis or specific names. The overall appearance is that of a historical manuscript or a personal letter.

Handwritten text in a cursive style, continuing from the previous page. The script is consistent with the one on the right page. The text is arranged in vertical columns, typical of traditional East Asian writing. There are some variations in the thickness of the strokes, suggesting different penmanship or emphasis. The paper shows signs of age, with some discoloration and wear at the edges.















4  
 虫の音もこもちきりり響ひさく 淋くくくくくくくく  
 俣よきく向ひ越方 移来のるるも 思ひつゞけせめり  
 うきも情くこのまらひむれが 亦ひるもまの理もひらねん  
 野舞ハせうんげも

今ふ世あわきとるる身のあらぶ世よ

とも入ぬ方の山の露の月

ト何んか〜 十たのり Chantam け だぶカ 派も 感傷も 終る  
 けん

故郷有母秋風涙 旅館無人暮雨魂

と互ふ遠く 心を探り 今の情ふ 准へて ちりけりぞ  
 旅路の多ぶ 且て 草分衣 志あまらう 一 途を くるる 者  
 是バ 伊勢 尾張 二 宿も 越て せうけくも 末ハ 何れ こそ 江  
 後河の 國も 志ら 向ひ 何と 伊豆 相模 思ふ 終る  
 山登 舟 遠くも 志ら 旅の 空 四方の 八重 舟 舟 舟 舟  
 客の 途を 埋む 旅の方ハ 白雲の 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟



宥<sup>ゆる</sup>兵<sup>へい</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>系<sup>けい</sup>押<sup>おし</sup>羽<sup>は</sup>方<sup>かた</sup>の<sup>の</sup>海<sup>うみ</sup>の<sup>の</sup>面<sup>めん</sup>沖<sup>おき</sup>の<sup>の</sup>山<sup>やま</sup>崎<sup>さき</sup>の<sup>の</sup>浪<sup>なみ</sup>荒<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>る<sup>る</sup>  
舟<sup>ふね</sup>の<sup>の</sup>上<sup>うへ</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>へ<sup>へ</sup>一<sup>いつ</sup>行<sup>い</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>松<sup>まつ</sup>風<sup>かぜ</sup>寒<sup>さむ</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>  
暫<sup>しばしば</sup>付<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>止<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>也<sup>なり</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>途<sup>みち</sup>を<sup>を</sup>助<sup>たす</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>方<sup>かた</sup>に<sup>に</sup>登<sup>のぼ</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>言<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
文<sup>ぶん</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>言<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>又<sup>また</sup>今<sup>いま</sup>更<sup>さら</sup>の<sup>の</sup>別<sup>わか</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>竹<sup>たけ</sup>の<sup>の</sup>中<sup>なか</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>  
酒<sup>さけ</sup>の<sup>の</sup>大<sup>おほ</sup>樽<sup>づん</sup>相<sup>あ</sup>模<sup>も</sup>狭<sup>せま</sup>川<sup>がわ</sup>流<sup>なが</sup>れ<sup>れ</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>身<sup>み</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ど<sup>ど</sup>り<sup>り</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>解<sup>と</sup>け<sup>け</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>  
松<sup>まつ</sup>の<sup>の</sup>や<sup>や</sup>も<sup>も</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>候<sup>こう</sup>の<sup>の</sup>社<sup>やしろ</sup>の<sup>の</sup>色<sup>いろ</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>深<sup>ふか</sup>き<sup>き</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>  
が<sup>が</sup>系<sup>けい</sup>は<sup>は</sup>系<sup>けい</sup>江<sup>え</sup>船<sup>ふね</sup>腰<sup>こし</sup>紙<sup>し</sup>波<sup>なみ</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>女<sup>め</sup>の<sup>の</sup>身<sup>み</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>へ<sup>へ</sup>て<sup>て</sup>  
草<sup>くさ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>け<sup>け</sup>て<sup>て</sup>強<sup>つよ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>家<sup>いえ</sup>を<sup>を</sup>後<sup>あと</sup>金<sup>かね</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>

置<sup>お</sup>所<sup>ところ</sup>飛<sup>と</sup>龍<sup>りゆう</sup>の<sup>の</sup>二<sup>に</sup>名<sup>な</sup>を<sup>を</sup>記<sup>し</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>時<sup>とき</sup>を<sup>を</sup>た<sup>た</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>居<sup>い</sup>る<sup>る</sup>  
右<sup>みぎ</sup>の<sup>の</sup>文章<sup>ぶんしょう</sup>は<sup>は</sup>京<sup>きやう</sup>保<sup>ほ</sup>の<sup>の</sup>頂<sup>たか</sup>の<sup>の</sup>板<sup>いた</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>  
思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>文<sup>ぶん</sup>句<sup>く</sup>の<sup>の</sup>小<sup>せう</sup>の<sup>の</sup>寺<sup>てら</sup>が<sup>が</sup>名<sup>な</sup>の<sup>の</sup>跡<sup>あと</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>見<sup>み</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>  
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>  
東<sup>あづま</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>  
の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>  
正<sup>せい</sup>史<sup>し</sup>實<sup>じつ</sup>傳<sup>でん</sup>の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>文<sup>ぶん</sup>庫<sup>こ</sup>卷<sup>まき</sup>之<sup>の</sup>十一<sup>じゅういち</sup>



正史  
実傳

いろは文庫卷之十二

江戸 為永春水著

第廿三回

あゝおはさ（おはさ）小林平八郎（おはさ）の  
 必死を救ひ（ま）ます（ま）二津浦（ま）とも（ま）介抱（ま）し（ま）と（ま）ど（ま）ん（ま）の（ま）振（ま）る（ま）を（ま）伊（ま）ふ（ま）  
 義理（ま）よう（ま）ね（ま）借敷（ま）多く（ま）親類（ま）縁者（ま）の（ま）情（ま）を（ま）強（ま）く（ま）  
 被（ま）呈（ま）身（ま）の（ま）立（ま）ぐ（ま）ま（ま）さ（ま）り（ま）り（ま）ま（ま）る（ま）り（ま）の（ま）ゆ（ま）ゑ（ま）二（ま）人（ま）の（ま）ろ（ま）と（ま）も（ま）み（ま）  
 野（ま）中（ま）の（ま）井（ま）へ（ま）身（ま）を（ま）投（ま）て（ま）死（ま）ま（ま）ん（ま）と（ま）存（ま）し（ま）よ（ま）く（ま）を（ま）包（ま）ま（ま）さ（ま）せ（ま）給（ま）り（ま）







極月十四日の夜深更に及びて義士の面々友討の  
第の高野の家中周章の中ふ小林平八郎の一人  
がしも寝惚する心ありしと覺れ且て其の夢を  
非番のまづそ身の宅の眠りしが物音を以て驚く  
目を覚めし主案の案の案を起して其の案を  
言國を支度を調身持ふ由立戸を蹴破りて踊り出  
彼腹を小股の抱へ友討の人数の透をうらみ編  
者の社の方へいり兼てかぐけて並けりり

ありし濡ふと編者の家根へうけをやくも家根へ  
うけ登り忽地濡ふと片もめを引上げ蝶の外へ投  
掛て彼腹を抱き一怪をきりしは此時いよいよ義士の  
人へうち入らぬめめそ言國へ押入りて  
長家の方へ同じくもめをとりけりり又肉々加勢の  
辻登り丁番物見もそのへざりけん小林の人の苦  
しくを安を喜び出町をうける和奇鴻伊勢の軒  
下へ入り戸をうらりと敲きけ且つ折縁家内も眼を



覚しき

伊藤

誰人ぞとてかまは

小林

ついでに

眼が覚ら

とて

小林平八郎

であつた

らまてトのめを固う

ついでに因の命の親

月のまき

家内へるげ

家の大愛

由緒の所へ

元来覚悟

母もど

ものも

大りの

期のお

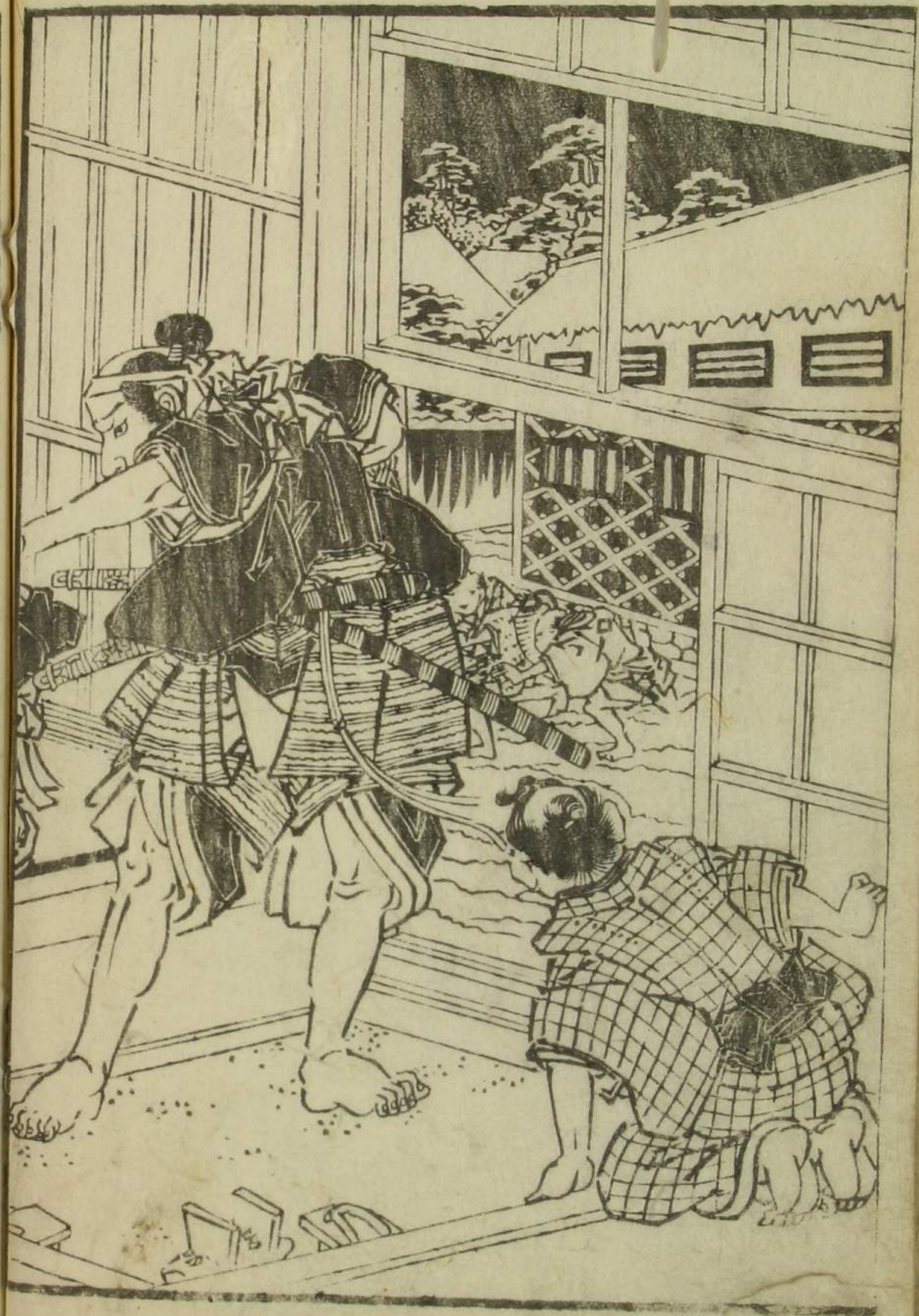
見送

うけ

うけ

うけ







トりのを資有後のゆまゝして再度あまの塚の近舟うけたる  
階子とかけ登り又も福寿の社の家根より庭の方と  
花むり内殿をさうとせり約後討の人々と戦ふて実ふ  
いさぬしき物に新討の隙を委しく視べしともく世の  
中の人情義士の方と具願ふしと師直方を憎み操  
あつたを好む悪を捨るの公より発れべりともものるひ  
まごども中ふいさうう差別あるべし不仕合を小林の高  
野の家来たるゆきの義士も勝る働きしと然も

大丈夫たるもの行状寐耳なる事の表討せうけとん  
周章のもろく小児を抱いて冊を毛枝飛鳥のおも  
身のよりまゝ一和舟浦氏をよめて引返し大敵をよ時  
死をのぞいたよき一客形の師直方の大患居めて四十七  
重なる百傳の英勇多うと賞めさべし  
。斯くて和舟浦伊勢の小林平八郎の娘を大切め  
養ひしが琴浦の實もゆまざれば増更み可  
能ぐりて成長の後け腹の贅肉より鏡師の家



業を傳へて家會とちけりが彼娘の實の父小  
林氏の討死を兩親より圖傳之歎きうりて火事の  
中より我身を助け出と和奇鳴の禰けられし  
災難のおもひまゐるんども考へて九十余文の書物を  
保ちし書物一日もこぼれしるるゝ物の本後反  
紙をよみ思及巻の巻付の條がいふに見る度毎の  
歎き憤怒てはの條を引破り捨しとて實は小林の  
娘なりしが然もゆりぬぐみりまゐるんをされを彼

小林の娘の腹より生れしをとりてまゝにわが  
鴻の家を相續し血脈を京都浮世屋師  
存家宗理より傳へし今人の名は小林の娘の孫の  
實よりとて其故は百七十八年以景の宗理の  
實よりしるの鏡師伊勢の家を傳へて終山町と  
し肝ふ在りしがその男の子の若死せしゆは他家  
より養ひをせしり今も家の名は存家宗理とて何某  
との御鏡師がまゐりしとてや如かきれば宗理



とくし一画六 小林平八郎の血脈めて素いひ  
まるまきしもの

亦院塩谷家の浪人の種くの傳院ある中江山野子  
十内の浪人七 暖野の裏木在り一月のり風  
菰の住居まりけし彼人の夢まきしものしと書  
たるを見たりしもの

世にびびり野の仇ありとく世にのん見  
て綾羅錦繡金銀珠玉もあつむり止る

業門前藤の岡ら思て人のとくし  
道もきく月より外の友もあけまじりしと  
見便もあ

○あひひ出らふ一の山のゆきむら

ころしー 神のゆきどとも見

○ふれたる幾百年をけく人未て

代くあうらぬあがらむけ

尾 九月の中旬暖家の草屋はまき



録残せし哥ありとぞ

忠臣義士の功を賞ふ天の余りゆふよとぞ其節み

秘蔵せし由縁ありゆめゆめ秘蔵せしゆりゆり

今も尾張の名古本関戸あり桂川の龍籠と

りつ室井其角が都ふ登りし節桂川を渡り折

る川流まの物と捨る男の腰に提する小笠籠の美

麗よりければ好むの如深き晋よりけしむ彼影を

その男に酒代せしむせそ其ひうけ東ふりち深うて

花籠の造用の桂川をて求得る影なればその

傳ふ名もて桂川と傳ひ秘重せしがまことふ銀湯の

宗匠東の各高き晋より其角が風流のわりのけを

遺しゆめなればゆめも其頃の各物とまり風

雅の序の出し草よりしを茶屋の師匠めてゆきを

初めはる山田宗伴が其角より乞求り後の高野

師直の方へさし出りけしむ彼家めてゆめを

いづきしか常ふ居るの茶のつらふとまを士



最前さいぜんの退ひきかき花籠はなかごと見分みわけて浅草あさくさの海うみの腹はら  
 沙すなの包つつみ高野たかのの氏の首くびの根ねの根ねありしころ謀はかりりて  
 鈴すずの穂ほ先まへの貫つらねまのまゝにまくく園おん見けん寺じへ持もちりひるせ  
 彼かの寺じのそ大おほきさのまゝの思おもひ出でて花籠はなかごと改かへりうねぐ  
 見けん覺かくへ園おんありし其その角かくの柱はしら川の花籠はなかごありしころを  
 寺じ傍かたわらの教しよえを垂たげまげおまをま受うけ入いりしもの武ぶ望ぼうしと  
 凡たゞ雅みやびの家いへの傍かたわらへ後のちの餘あま餘あまの籠かご花籠はなかごを柱はしら川の  
 真ま実じつ物ものありしとそ久ひさしく園おん戸どの珍めづり蔵くらあるところや

播州 有年領  
 龍早川

長持ながもち人ひと星ほしの  
 一ひとのひがナアジ  
 遠とほけりぬナアアヤットコところん  
 何なにれとく「サア」く休やすめく  
 イヤアい世よの降ふりで犬いぬその水みづがま  
 一ひとせ「水みづがま」しつ酒さけ代しろも増まへ



貫ひなアアアア酒代は坊やが川向う水汲  
山を帰人が着るぜアホニアアアア黒熊娘が見える  
又日の暮るの早く河を流して止宿をせぬア  
くモウ一息をせよアアアアアアアアアアアアアアアア  
の夢醒ゆアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
も世の両水水まで不案内でなるく小瀬瀬と  
うらぬ早流の浪をぬ日も西へ入相の間近き河原を

うらぐと人待顔の娘と下僕旅人の旅人ゆ遠の  
小顔見合る花の色歳は大方十八九素顔なまとも  
色白く世小類なまとも女もまごの噂とりぐり過てそや  
旅人も途絶へる村一個の川越男が酒の樽持り定  
えもよろく一から娘の側寄より直さぬ身を捕へ  
アア娘はさん肩車のお乗を成へ川が深くなるて  
あふらねで白ひらぬア後を者アおあやうねト捨合  
一個ふも足さる雲助がアヤイく塔がま其娘の



ナ先刺は身が口にとりけて、軍の其方の盤で娘はの  
羽二重の指も、其瀬瀬をまきつて、あつりのりトま  
くまび又一人が走り出。コトサく其方達不及意を  
仕中ぐらア、早川ちや、は頃六ふ及ぶ好男が  
あるのウサア、は身が抱て乳を吞せまが、怖く  
招小そろくと、後とまらふト二人とも、娘を奪ひ  
戦、まぶ娘の怒りま、立退んとするを、取りまむ  
法の仕方小佐の男、憤然と、りて中へ飛入、下男

やしくは、奴等ア、何を仕や、くる途方も、ね女を、り  
と思や、ぐるり、は、奴さんが、お供を、て居ら、ア、指で、  
さく、て見や、ア、が、合点、ま、る、りの、りト、り、早く、二  
人の、川越を、突、飛、せ、を、来、仕、り、け、一、宣、花、の、く、と、  
残り、一、重、助、川、越、ど、も、又、五、六、人、走、り、り、下、僕、を  
取、巻、大、勢、を、て、敵、倒、一、お、る、や、ま、一、娘、を、捕、へ、く、ら、  
上、河、東、の、西、の、林、を、さ、く、て、連、行、ん、と、ま、る、其、の、所、に、来、  
くる、武、士、の、浪、人、体、編、必、死、脱、捨、忽、ち、小、雲、助、ど、も









不敵勝左門  
籠川  
乙の難を  
かまふ











國をへきぬり途中馬を奪ひ去りて去る  
く走り行由を競ものもの百千里の遠路を  
馬を奪つげらるるものや後命馬を奪つて  
とも人の死かばはくべき事実の地谷家へ常の由  
入の道中清合竹某の方へ海邊の人らりて火  
を言ひ言ひその精令人直に回を賜へりて先觸を  
出して人足せる事高きを言ふり富次郎の早業を  
解ふけさせりとのとあり

再説不破林を以て正種ハ久しき以て此の地を家と海人  
一とて忠義の志ハ流石の如く是非を悔して高貞の  
君恩を報し奉らんと思ひ居るり一断ふは友の大業  
國家滅亡の運途を聞よりも定めて大星をよめ國を元  
の法士一同ハ誓死の心をなすべしと公せき昔後  
周を軍まがら彼娘を従せ同たりて回屋へりり川越人  
是の不法と断り娘をばはかき送り届ける様ぬ處  
く回屋場の役人ゆを付其身ハ別きて限宅へまり解



城の中に入りて討死する支度小及ぶを勇しくけり  
ふとるる見え せんんはまきり けん  
不彼様有休が先年例一切の一件を浪人  
様合入立退浪宅せし度ハ世ハあぶるものも  
ふとるる一まきりふとる不規但し忠臣の人  
不破氏の浪人して後志の不破を度とあつて  
まづる度深くされども國元へも帰りて居  
任まらん近頃されば城中の人々も久しく別  
きて疎縁さればその心ざしを毎にみる人も多

くりーとむ

あまのり 不破が城下ふりける上可趣よりハそりゆ  
げんらうおれい 自れい せんん  
え老 大星の内名をうけて 經人合入下る度  
かご さが 元 せき つかい せんん  
義早川を路を救ひきりける 娘小再合入して仇  
討の便道せり 舟無きまで けい編小 親残  
しつらあまのり 五編小出り

正史 寶傳 いろは 文庫 卷十二



江戸 爲永春水撰る

江戸 溪齋英泉畫泉

南總里見軍記 繪入實錄 全本十卷

十杉傳第五編五冊 久しく延滞の事あり 爲年ハお遠く賣 出さぬ

春色狂訓亭作 国直画 中形人清本前後 六冊出来仕



